

【表紙】

マリー=アンリエット=ベルトレ・ド・ブルヌフ夫人の肖像

ジャン=マルク・ナティエ画

解説は20ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

文楽の楽しさ.....如月青子 4

伝統芸能と青年層.....藤波隆之 7

国際文化交流の現状と課題  
——国際交流基金のあらまし——.....草場宗春 9

〔報告〕  
文化財保存修復国際研究センターに学ぶ  
.....藤村 泉 12

〔随想〕  
立膝考.....北村哲郎 15

文化庁ニュース

第4回日本民謡まつり終わる  
——皇太子殿下も御観覧——.....17

米国巡回「琳派絵画展」について.....18

スペイン国王・王妃両陛下来日記念展  
「スペイン絵画・ベラスケスとその時代」.....19

昭和55年度都道府県宗教法人  
事務担当職員研修会の開催.....19

〈新設法人紹介〉  
財団法人東京交響楽団.....20

祭礼歳時記シリーズ ⑧

12月の祭り——銀鏡神楽——.....榎本由喜雄 21

我が県の文化行政

文化の創造と継承のために  
——富山県の文化行政——.....成瀬弘生 23

海外文化行政事情シリーズ ⑤ [CDI報告書から]

アメリカの美術施設.....松野 精 26

著作権シリーズ(18)

著作権の制限——政治上の演説等の利用——  
——時事の事件の報道のための利用——.....29

国立劇場ニュース.....31

## 国際文化交流の現状と課題

### ——国際交流基金のあらまし——



#### 基金の設立

国際交流基金は、昭和四十七年十月に国際的な文化交流を実施する特殊法人として設立され、ようやく八年を過ぎた比較的若い組織である。

基金が設立される以前の我が国の国際文化交流事業は、外務省、文化庁などの政府機関のほかいくつかの民間団体によって遂行されていたが、多種多様な国際文化交流事業を全面的に推進しうるような独自の財政基盤をもつ組織はなく、その必要性は広く各界から指摘されていた。特に昭和四十六年に至り、それまでの日米間の文化交流が主としてアメリカ側の資金に依存してきたことに反省が強まるとともに、東南アジアを中心とする開発途上国から我が国との文化交流の拡充が強く要請されていた。

こうした情勢に対応するため、文化交流の実施にとって不可欠な要件である永続性と財政基盤の安定性を可能とするような大規模な基金の

#### 草場 宗春

(国際交流基金人物交流部長)



設立の構想が生まれた。昭和四十七年度の政府予算で五〇億円の基金が認められ、その後年々増額され、現在では四七三億円となっている。国際交流基金の事業は、この基金の運用から得られる運用益、及び主として人件費等管理費のため外務省からの補助金、並びに広く民間から寄せられる寄付金を財源として実施されている。

国際交流基金は、我が国に対する諸外国の理解を深め、国際相互理解を増進するとともに、国際友好親善を促進するため、国際文化交流事業を効率的に行い、もって世界の文化の向上及び人類の福祉に貢献することを目的としている。この目的を達成するため、国際交流基金は次のような事業を実施している。

- 一 国際文化交流の目的をもつて、適切な人物を海外へ派遣し及び海外から招へいすること。
- 二 海外の大学等における日本研究及び日本語教育に対し、専門家の派遣、研究費の助成等の方法により援助又はあつせんすること。

#### 事業の概要

##### 〈人物の交流〉

文化交流は人に始まり人に終わるとさえいわれている。およそ文化交流を通じて国際間の相互理解と精神的連帯を培うには、人と人との心の触れ合いが極めて重要であり、したがって人を海外に派遣し又は海外から人を招へいする人物交流事業は、国際交流基金の事業の中でも最も重要な役割を持っている。

派遣事業には、長期派遣(数か月以上)と短期派遣(一か月以内)がある。長期派遣は、主に開発途上国において各種スポーツ指導にあたるスポーツ専門家、海外の大学・研究機関において共同研究・創作活動を行う学者・芸術家の派遣を対象としている。特にスポーツ専門家については、柔道、空手、バレーボール、体操等の専門家を一年以上の任期で派遣しているが、単に指導技術のみならず人間的にも優れた人が多く、受入国から高い評価を受けており、年々派遣要請が増大している。短期派遣には、海外における日本の文化に関する講演や国際会議等に参加するための学者等の派遣と、茶道、生花、邦楽・邦舞、スポーツ等を公演・解説し、我が

国文化を紹介する巡回派遣とがある。文化紹介のプログラムでは、伝統文化のみならず現代の我が国の文化を幅広く取り上げるよう配慮している。

長期、短期合わせて派遣者は、毎年二百名近くとなっている。

招へい事業には、長期招へい、短期招へい、及びグループ招へいの三種類がある。

長期招へいは、国際交流基金フェローシップといわれており、四か月から一四か月の間、我が国に滞在し、専門の研究を進めるものである。フェローの研究テーマは多岐にわたっており、我が国の古典文学、歴史、芸術、考古学をはじめとして、戦後の政治、社会、経済、教育にまで及んでいる。

短期招へいは、学術、芸術、教育等広い分野において指導的地位にある者を二週間程度招へいし、関係者との懇談、我が国の文化事情の視察等を行うものであり、これまで、アンドレ・マルロン元仏文化大臣、サー・アイザイヤー・バーリン元英学士院長長など、世界的名声を有する人も数多く含まれている。

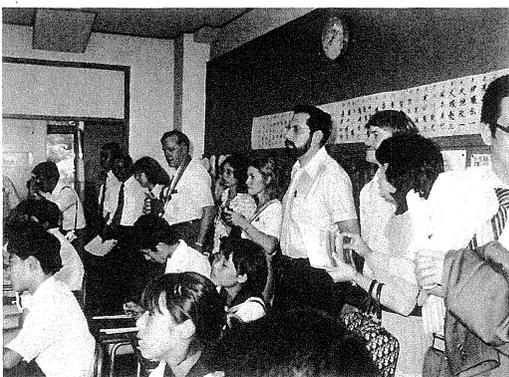
グループ招へいの中で最も好評なプログラムは、中・高教員の招へいである。アセアン諸国をはじめ一〇か国から各国十―二十名の中学・高校の教師を招へいし、我が国の教育事情を視察してもらっているが、帰国後、それぞれの教育を通じて我が国への理解を普及せしめるなど、その効果には非常に大きなものがある。これら三種類の招へい事業により来日する外

巡回展を世界各地で実施している。五十二年度のパリにおける唐招提寺展や五十四年度の英国におけるジャパンスタイル展などは非常に好評を博した。主催又は助成する展覧会は年間二五件ほどに及んでいる。

公演事業には、海外公演と国内公演とがあり、海外公演には主催事業と民間レベルで行われる海外公演に対する助成事業とがある。分野としては、歌舞伎、文楽、能、狂言、邦楽・邦舞などの伝統芸能に限らず、広く現代の劇団、楽団、舞踊団なども積極的に取り上げている。国内公演は、特に開発途上国の民族芸能、伝統音楽な



ジャパンスタイル展を御覧になるエリザベス女王



授業を視察する中・高教員グループ

国人は毎年七百名近くに及んでいる。

#### 〈日本語教育・日本研究〉

言葉の普及は文化交流の成果のバロメーターである。また、言葉の理解なくしては真の国際的な文化交流は不可能であるといっても過言ではない。現在諸外国における日本語学習者は、中国の百万人を含め百三十万人を越えており、我が国の国際的地位の上昇とともに年々増加しつつある。

このような日本語教育熱の昂まりに対応し、基金は、日本語教育専門家を各国に派遣し（五十四年度六十三名）、日本語の授業、現地講師の

とを招へい公演し、相互交流を図っている。年間の事業件数は、主催、助成を合わせ二〇件を越えている。

#### 〈図書・視聴覚メディア〉

図書を通ずる文化交流には永続性と伝播力があり、波及効果が大きい。基金では、自らの出版事業のほか、日本関係図書に対する出版援助、外国の大学等に対する日本関係図書の寄贈に力を注いでいる。

また、映画、テレビ、スライド等視聴覚メディアによる文化交流には、広く一般国民に直接働きかけようという利点がある。基金では、優れた文化・教育テレビ番組を購入し、海外の公共テレビ局に提供しているほか、我が国の優れた映画等を紹介する巡回映画会の開催、開発途上国に対する理科教育用教材スライドの提供等を行っている。また、在外公館等に基金作成の文化映画、外国版に改訂した劇映画等を備え付け、映画会の実施や貸し出し等に協力を行っている。

#### 今後の課題

国際交流基金の資本金は、発足八年目にしてようやく四七三億円であり、そこから生まれる運用益は年間三五億程度である。これに補助金及び民間寄付金を合わせても、年間予算は五二億程度であり、欧米諸国の文化交流機関と比較して余りにも少額である。創設時の目標である一、〇〇〇億円基金に早期に到達するよう、政府出資の飛躍的拡大が望まれるところである。

指導等にあたっては、現地講師への助成、日本語教材の開発等の事業を行っている。特に本年度から中国における日本語教育を援助するため、外務省・文部省と協力して日本語教育センターの設置、日本語教師の派遣、教材の購送等特別のプログラムを実施している。

諸外国の日本研究は、我が国の古典文学研究等を中心とした日本学（ジャパノロジイ）の時代から、今や現代日本のあらゆる側面を研究する日本研究（ジャパニーズ・スタディ）の時代へと移行してきた。

このような日本研究者は全世界で三千五百名を越える状況にあるが、基金では諸外国の大学における日本研究講座に対し、教授の派遣（五十四年度六十九名）をはじめとして、現地スタッフへの助成、研究費支給、博士号取得のためのフェローシップ、現地講師の招へい研修等の諸事業を行っている。また、国内においては、基金事務所内に日本研究センターを設け、在日研究者に対し、情報の提供、セミナーや研修会の開催、図書館の開放等を行っている。

#### 〈展示・公演〉

基金は、日本人の美意識と生活感情から生み出された芸術や芸能の世界を通して、諸外国と日本の相互理解を深めるため、国内国外において日本文化を紹介する各種の催し物を実施している。

展示事業には、海外で催される国際美術展へ我が国の優れた芸術家の参加を行うほか、伝統美術、工芸、版画、現代美術、写真などの海外

同時に民間資金の導入に努める必要がある。最近初めての試みとして、中近東スポーツ交流促進特別計画が発足したが、これは民間寄付金二億五、〇〇〇万円、基金支出二億五、〇〇〇万円と、中近東とのスポーツ交流事業を推進しようとする計画である。このような個別のプロジェクトごとの民間資金の導入方法も有効と思われる。

国際交流基金の事業は既に述べた如く、非常に多岐にわたっている。いずれも重要なものではあるが、長期的にみた場合、我が国の文化交流機関の核として、最重点の事業を拡大・充実していく必要がある。それは日本語の普及であろう。英米仏独の海外文化政策の中心も自国語の普及であった。現状では大学における日本語教育に重点が置かれているが、今後は中等学校において正規の教育課程に組み入れられることにより、学習の始期を早める必要がある。そのためにはそれぞれの国における日本語教師の養成と国ごとの教材の開発が不可欠である。国際交流基金のみならず、文化庁、文部省、外務省等関係機関の協力により、長期計画をもって推進する必要があると考える。

最後に、国際交流基金の海外施設の飛躍的拡充が望まれる。現在、文化会館の所在地は、ローマ、ケルン、ジャカルタのわずか三か所である。日本語教育センター、各種文化的催し物の会場、広報センターなどの総合的な機能を有する文化会館を海外各地に設立し、整備するよう努力することが必要である。

### 編集後記

○最近、若い人たちに伝統芸能への関心が高まっている。藤波隆之氏も書いておられるように、とくに文楽に若者の愛好者が増加してきていることが注目される。長い年月の中で磨かれてきた伝統芸能は、現代の若者にも訴える何かを秘めているのであろう。

○如月晋子氏は、人形浄瑠璃文楽の楽しさについて、人形、義太夫節、三味線など、それぞれの持つ「魅力」について述べておられるが、文楽鑑賞の手びきとして参考になるのではなからうか。また、我が国の国際文化交流については、つとにその充実が望まれているところであるが、国際交流基金における文化交流の現状等を草場宗春氏に解説していただいた。○今月の表紙は、昨年国立西洋美術館が購入したナティエの作品を紹介した。

(〇)

### 広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課

TEL(〇三)三六八二(四一)代表

### 「文化庁月報」十一月号

(通巻第一四六号)

昭和55年11月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号  
発行所 株式会社 きょうせい

本社 〒100東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所 〒100東京都新宿区西五軒町52番地  
電話(〇三)二六八二(四一)代表

振替口座 東京 九一六一番

印刷所 協行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料二九円)  
年間購読料 二、一六〇円(送料共)